短編競作を読んで

崎本　智（６）

身勝手な意見かもしれませんが、一読者として読みました。
ばらばらの意識の中で読んでしまったので、何か一貫性を欠いた批評になった気がしますが、僕がそれぞれの小説に期待する何か、あるいは書き手に期待する何かです。
抽象的な言い方に説明を求められれば、答えられると思いますのでご一報ください。

「五月の同行」
まず『短編競作』３Ｐ上段「栓ない」→「詮ない」かと思われる。
車に乗ってイオンに行くだけの物語が異様なものへと変化できている。その異様さを助ける「同行者」という存在が、人間ではないことは何となく判るのだが、答えは出ない。
「同行者」の言うセリフが中途半端に陳腐なことが気になった。
イコさんの小説は、「電気魚」もそうなのだが作品内の大事な存在の演出がやや手薄な気がする。「電気魚」と「同行者」の造形において、疑問だ。
それよりも細部（本作で言うと光の描写など）をつくりこんでいる。
細部も重要かもしれないが、このままだと何故「電気魚」なの？何故「同行者」はこういうセリフを言うの？ということに説得力を持ち得ないだろう。
プミさんのおっしゃる不快感は、一貫して本作を貫いている。
一読しかしない読者にとって（特に後半）もう少し、丁寧に描写しても良かったのではないかと思う。

「スイッチ」
「平均的な人生」を送ってきた世耕亜夢。主人公の性格や生活をもっと作り込むべきかと思った。何かに異様にこだわっていたり、とても好きなものがあったり、だから女の首が出てきたときにそれらのものとの伸縮から世界を眺めるように書けばいいのかもしれないと思った。例は何でもいいのだが、
そんなわけで、彼女の死を知らされた時、僕は６９２２本めの煙草を吸っていた。
（村上春樹『風の歌を聴け』）
「彼女の死」という唐突な世界に対して、主人公の造形を担保する「６９２２本めの煙草」。
唐突なものに対して、主人公が「理論」だけで丸裸でつき進むのではなく、どこかに主人公らしさを残したものを出してほしかった。
思弁的であるだけではなく、具体的な主人公の像をつくるべき。

「リセット」
リセットというＳＦ的設定を盛り込んでおきながら、その実はいとこの葬式に立ち会うという何とも地味な物語が、逆に生彩を帯び面白く読んだ。

前半の机を買いに行くところはいらないのではないかと思った。確かにリセットという制度については読者に意識させるエピソードではあるが他にも書くものがあった気がする。
個人的には主人公の心象をもっと風景描写にたくして描く場面があってほしかった。この文章で風景を読みたかった。あとはプミさんのおっしゃる通りところどころで、もう少し考えてほしい描写があったので細部までこだわってください。
お葬式の場面で参考になる写真家川内倫子「**Cui Cui**」という写真集をご覧になってください。そして活かしてください。インスパイアを受けると思います。

「いざ起きて戦人よ」
一読した時に青木淳悟『私のいない高校』を思い出したのは、この小説における細部の情報の使われた方が、小説を面白くするために配置されたためではなく、「ただそこにある」という印象を与えるからだ。それぞれの情報が伏線となっていたり、小説的な効果を生むことに貢献していない。まさに私小説だから、それをそのまま書くことにしたという作者の決意が見えそうである。だが、その態度がこの小説において成功しているとは思えない。徹底が足りない。それはあらゆる細部にわたる情報を徹底的に書きこんで、情報を無意味化した『私のいない高校』に対して、この小説が持つスタンスは、情報は小説の効果となる情報もあれば、何の意味をなさない情報もあるというものだ。であれば意味をなさないものは消すべきである。
二読目には、原爆などの時代状況とユーモラスなキャラクターの出現から大江健三郎、そして破天荒な主人公から中上健次を彷彿とした。
恐ろしいことである。ある意味で、情報の無意味化とした『私のいない高校』と過剰な意味を背負った大江＆中上からこの小説が成りたつような気がした。
それがこの小説が「畸形」とプミさんが読んだ原因ではないだろうかと思う。
無意味と有意味の奇妙な共存関係。
他の意味でも畸形的な側面はあり、前半はそれぞれのキャラクターが固有の価値観を持って生きておりそれを絶対的に譲らないことから各キャラクターの性格は際立つのに、後半では「単位をおとす」という何とも平均的な高校生が悩む話題に、平面化してしまう。
個性豊かなキャラクターのぶつかり合いから一般的な話題への平面化。この短い作品の中で、この「変調」はあまりにも唐突すぎるだろう。

「目覚め」
二人称小説をあまり読んだこともない私に何が言えるだろうか。ひとまず、この小説の語り手はある視点を持って、「客」たちを眺めることになる。その「客」の描写がややぼんやりとしたものでイメージがしにくい。オチやその発想に、ドキッとすることもあった。しかし緑川さんは読書家で古今の文学を読まれている、それを鑑みたうえで、こういう作品を読み手として、読まれた時に「小説的快楽」を得ることができるのか判らない。「異形の

者」を読んだ時に感じた「書き過ぎている」という印象は受けなかった。文章はシンプルを貫いている。

「劣情に惑う剣」
二人の名前が剣心と弥彦に酷似していて、どこかのジャンプ漫画かと一瞬おもった。
そして、読むにつれて「これ、舞台が幕末とか明治とかじゃないんだ！」って驚いた。最初の道場のシーンは、何だったのだ……。
この作品に対して、もっといえば常磐さんの小説に対して、厳しいことを言おうといつも思って読み始めるのにそこにハマっている自分に気づくことに驚く。物語うんぬんよりこの文章の圧倒的下手うま感。この人が純文学を書いたら恐ろしい気がする。何か新しいものを生むのではないかとドキドキする。何だか恐ろしい才能が眠っている気がするのだが。

「オレンジの巣」
ふしぎな作品で、俯瞰してみるとその言葉の集合に愛着が生まれてくるのだが、一文一文に目を凝らして見るとごく平凡で愛着を持たない。
非常に危ういことしか言えないのだが、もっと一語一語にこだわりを持ち、何の言葉の置き換えもできないぐらいに密度が高まればすばらしい作品になるとおもう。
その発想や場面転換には、読むべきものを感じた。素晴らしい単語の「点」が押し寄せてくるのを期待します。この作品の「線」には共感しました。

「親子の敗走」
完成度が高い。そのままどこかの公募にでも出せそうだなと思った。そしてだいぽむさん小説うまい。……がこの技量を活かして何かもっと真剣なものを書いてほしかった。「これが真剣だ」と言われれば返せないのだが、何となくギャグみを帯びていてもっと志を持ってほしいなと変な老婆心を持ってしまった。技量を求める文章ばかりを書いてきたが、志を求めることになるとは。
つーか最初から、変な事教え込まずに１皿１００円のとこに行っておこうよ。
洋太がかわいそうだよ。

「出来そこないのマリア」
僕は「赤」という色彩感よりも、この小説の時間の流れ方が良いなぁと思った。それぞれの時間にはもう戻れなくて、二人の関係はその時に聴いていた音楽や奏でていた楽器で印象的に描写される。
「出来そこないのマリア」とは、俺が書く彼女のスケッチが実物よりも下手で、実物の彼女の美しさには及ばないという謙遜だろうか。
既に起こったことを断章形式で、思いだすように描くのが良かった。

特に批判することも思いつかないのだが、何となく物足りない気もする。独りになったときの俺の生きることに耐えられない奇妙な行動をもっと描いて、苦悩する俺像を明確にしてもらっても良かったのかと思う。

どれも読んでみて後悔はなく、面白かった。レベルが高い作品が集まったとは言えないけど、「何かあるなぁ」と秘められた今後を期待する作家たちの小説群であった気がする。

以上